こまったときの親鸞聖人

安田 登（やすだ のぼる）
能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
寺子屋 講師　（阿弥陀寺）
こどもおばけ合宿 講師　〃
主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』『能　650年続いた仕掛けとは』他多数。

イラスト　中川 学

「自力の三心（じりきのさんじん）ひるがへしの巻」

以前、このコーナーで「死ぬまで一緒にいるくらいなら、まだ我慢はできる。でも、墓に入ってからも未来永劫、あなたと一緒というのは、考えるだけでぞっとする」といわれた男性の話を紹介しました。

◆◆◆◆◆◆◆◆

昨年の九月、「死ぬまで一緒にいるくらいなら、まだ我慢ができる」という女性にとって、ショックなニュースが飛び込んできました。「若返りの薬」の実用化が見えてきたというのです。

その薬は、ハーバード大学のD・シンクレア氏の研究チームによって開発が行われています。まだマウスの実験段階なのですが、シンクレア氏は自分と家族の体を使っての実験も行いました。その結果、四十九歳のシンクレア氏の生物学的年齢が二十五歳に戻り、七十九歳の父親は旅行や、さらには急流をゴムボートで下るラフティングまでも楽しむようになり、閉経していた四十歳代の義姉は月経が再開したそうなのです。この技術を使えば、傷ついた臓器の再生や、麻痺状態になってしまっている人を再び起き上がらせることも可能になるといいます。

治験を二〇二〇年から始め、二〇二五年までには実用化したいそうで、その時の一日分の薬の価格はコーヒー一杯くらいになるとか。

そんないいニュースならば「ショックなニュース」ではないのではないかと思う方もいらっしゃると思います。

しかし、この薬の実用化には（いい意味での）副作用があるのです。それは、この薬によって寿命は百五十歳になるのではないかと言われていることです。身体年齢も下がるので、元気で長生きになります。いやいや、百五十歳どころではない。数十年後には五百歳になるのではという人もいますし、老いる速度を上回って医療が進化するというフェイズに入れば、もっと伸びるかもしれないと、グーグルのレイ・カーツワイルなどは言っています。

どうですか。

「死ぬまで一緒にいるくらいなら、まだ我慢はできる」という方。五百年ですよ、五百年。いまのご主人（あるいは奥様）と五百年間、一緒にいることに耐えられますか。むろん五百年でも千年でも一緒にいたいという方もいらっしゃるでしょう。しかし、「死ぬまでなら我慢はできるけれども、墓に入ってからも一緒なのはイヤ」という方にとってはショックなニュースではないでしょうか。

◆◆◆◆◆◆◆◆

そんなの信じられないという方、現代も人生百年時代と言われ出しました。これは少し前の日本では考えられない話でした。

今ではアラフォーなどといって、四十歳でも若々しい人が増えています。しかし、ちょっと前までは四十歳を超えると、もうおじさん、おばさんでした。

ちなみにバカボンのパパがちょうどアラフォー、四十一歳という設定です。あの姿が、当時の四十歳なのです。サザエさんのお父さんの波平さん（磯野波平）は五十四歳です。私たちから見るとおじいさんのような波平さんは、まだ五十代の前半です。いまの平均寿命はサザエさんの連載が始まった当時に比べると三十歳以上伸びています。単純計算して、波平さんを現代の年齢に直すと約八十八歳になります。これが人生五百年になったら、波平さんは五百四十歳です。完全にSFの世界ですね。

人生五百年時代になると、いろいろな価値観が変わるでしょう。

「死ぬまで一緒にいるくらいなら、まだ我慢はできる」という方は、とても我慢なんかできなくなるかも。「離婚はしたいけれども生活費が心配」という方のためには、すべての国民に対して最低限の生活を送るのに必要とされている額のお金が定期的に支給される「ベーシックインカム」が制度化されるかもしれません。百歳で離婚、百十歳で再婚なんて人もたくさん増えそうです。

仕事や学び、居住地も限定されなくなる。人は一生のうちにいくつもの人生を生きるようになるのです。まるで夢の世界ですね。しかし、どんな夢の世界になっても、最後に残る大きな問題があります。

それは「それでも人は死ぬ」というものです。

人生五百年時代の「死」というのはどういうものになるのでしょうか。私は、「死」に対する不安や恐怖は、いまよりももっと増すのではないかと思っています。

宗教が力を持っていた時代、人はいまよりも安心して死を迎えていたのではないでしょうか。

「死んだら、お母さんに会える」、「おじいちゃんに会える」。

死後の世界で懐かしい人たちに会えると思って安らかに眠りにつきました。昔に比べれば現代は科学が発達しています。心の学問である心理学だって年々新しい理論が出ています。本当だったら「死」に対する恐怖は減るはずです。しかし、実際は逆です。科学が宗教を駆逐すればするほど、人は死が怖くなります。

「迷信なんて信じない」と言っている人も、自分の「死」が目前に迫ると死後の世界のことを考えるといいます。

地獄だってそうです。みな心の中では「地獄なんてあるはずない」と思っているのに、それを否定しきれる人はいない。死の直前には「自分は地獄に堕ちるのではないか」という考えがちらっと浮かびます。

人は心臓が停止して脳への血流が止まってからも三分間から五分間は脳の細胞が活動を続けていて、この間は意識があるかもしれないともいわれています。

電話の夢を見て目を覚ましたら、目覚ましの音だったということがあります。目覚ましの音で起きたはずなのに、電話がかかってくるまでのストーリーがちゃんと目覚まし音の一瞬の間にできています。

夢の時間は数直線の横の時間ではなく、一瞬の中に長い時間が凝縮されている縦の時間です。死の直前の数秒間に見る夢は、最高度に圧縮された永遠の夢でしょう。その夢が悪夢の場合は地獄になり、楽しい夢ならば極楽になるのではないでしょうか。

「自分は地獄に堕ちるのではないか」とちらっと思ったら、その人は永遠の悪夢を見続けることになるかも知れない。なぜ、私たちはそんなことをちらっと思ってしまうのか。それは善行をした人は極楽に行き、悪行をした人は地獄に行くと思っているからで、そして「自分は悪行なんてひとつも犯したことがない」なんて人はいないからです。

そして人生五百年時代になれば、私たちが犯す悪行はさらに増えます。ならば地獄への恐怖はもっと増大するでしょう。

そこで親鸞聖人のお言葉です。

定散諸機
格別の
自力の三心
ひるがえし
如来利他の
信心に
通入せんと
ねがうべし

（修行としての善行やふだんの生活で励む種々の善行など、修行によって往生を願うような「自力」はやめて、阿弥陀仏様にすべてをまかせる「他力」の信心によって、みんな一緒に極楽に往生しよう）

悪いことをするよりも善行をした方が気持ちがいい。それは当然です。でも「善行を行わなければならない」と思うと負担になり、それができない自分に対する罪の意識にもなります。また、「至誠心・深心（深く信じる心）・回向発願心（自分の善行を他の人のために使う）」という三心も大切です。でも、それにも「自分」が入ると、それらはむしろ害悪になります。善行も地獄への切符になってしまうのです。

親鸞聖人は「そういうのは諦めた方がいいんじゃないの」とおっしゃいます。だって阿弥陀様はすべての人を極楽に連れて行ってくれるって約束したんだから、それだけを信じればいいんだよとおっしゃるのです。

どれだけ悪行をしたかによって地獄行きか極楽行きかが決まる。そんなことはない。心配しなくたっていい。阿弥陀様が連れて行ってくれる、そう思うだけで極楽往生できるんだ、それが親鸞聖人の教えです。

人生五百年時代にぴったりです。

むろん、それすら信じられない人もいるでしょう。でも、そういう人は、「ああ、自分はそういうことも信じられないんだなぁ」と思うだけでOKなのです。

図書紹介

身体感覚で『論語』を読みなおす。
―古代中国の文字から―
著者　安田 登
550円＋税
新潮文庫

孔子が生を受けた紀元前6世紀、言葉は古代文字で書かれていた。後世に編纂された『論語』との異同を多く含む当時の文字で読むと、何が見えるのか。能楽師の著者が、膨大な文字史料と、自身の稽古で得た身体感覚を手がかりに孔子に向き合ったとき、現れたのは「心（自由意思）」という新しい概念で、「命（運命／宿命）」に挑む人間の姿だった。これが、世界初のこころのマニュアル＝論語の真の世界。いま通説が変わる！